

科目	学部	学科	専攻・コース
小論文	文芸学部	文芸学科	—
受験番号	氏名		採点

カレル・チャペックは、ロボットや原子力発電のイメージを、サイエンス・フィクションで作りあげたチェコの作家として知られます。チャペックの作品『マクロプロス事件』（1922）についての以下の文章を読んで、設問に答えてください。

【課題文】

古今東西さまざまな時代と場所に根づいてきた不老不死の伝説は、カレル・チャペックの『マクロプロス事件』（1922年）によって、20世紀に持ち越された。300年間生き続けた主人公は、世界に君臨するどころか、肉体の不滅に耐えきれなくなって、倦怠^{けんたい}に苦しみ、自分と比べれば短期間で死んで土に還る人間^{うらや}を羨んだ。

20世紀以降、地球の住人は、プラスチック、コンクリートから毒ガス、毒ガスとほぼ同じ成分の農薬、そして核燃料にいたるまで、大量の不老不死の物質に囲まれて暮らしはじめた。科学技術の進歩にともなって、簡単には壊れない安定したものをさらに欲するようになった。現代世界の起点であり、「骨の製粉機 knochenmühle」とも言われた第一次世界大戦で、生まれてからまだ20年も経っていないような若い兵士たちが首も手も足も心もバラバラに引き裂かれ、腐敗していったことの反動であるかのように。大量生産された武器によって人間が徹底的に破壊された大戦は、人間の壊れやすさ、解体されやすさをこれ以上ないほど残酷なかたちで明らかにしたのである。戦後4年たって世に出た『マクロプロス事件』は、大戦の悲劇をなかったことにして、大戦以前の時代をユートピア化したのではなかった。大戦の非人間的悲劇をもはや動かせぬ事実として、その悲劇のあとでも人類が存続するとしたらどう生き続けるのかを描こうとした。チャペックは、不老不死への人間の憧れをこれまでにないほどの確かつ情熱的に説明しておきながら、突き放すようにシニカルな態度をとった。この態度は、チャペックの研究者たちのみならず、本人も認める「相対主義」などではない。チャペックが、初めて、時間とともに老いて死に腐敗していく人間のほうが、不老不死の仙人よりも自由であるばかりでなく、仙人よりも賢くなりうる、という不老不死の対抗伝説を描いたことの意義を、本人の言葉に惑わされるのではなく、私たちはもっと考えるべきだと思う。とりわけチャペックのように熱に浮かされるようにして世界を描いた作家が、自分の作品を誰よりも分かっているとは限らない。

【藤原辰史『分解の哲学』（青土社、2019年）より。ただし、常用外の漢字にはルビを付した】

【設問】

上記の文章で述べられた、「不老不死の対抗伝説」についてあなたの考えを述べてください。その際に、不老不死に関わることをとりあげた、文学・アニメ・絵画・ミュージカル・漫画・音楽など、あなたが知っている作品で、不老不死がどのように描かれてきたかも例にあげて、あなたの考えを説明してください。

それをふまえて、共立女子大学の文芸学部で作家や作品などをどんなふうに学んでいきたいかを述べてください。すべてあわせて800字程度の文章にまとめてください。

